



(カット肖像は安井曾太郎作)

同志社人物誌(3)

深井英五

吉野俊彦



そこで、日本銀行の金融政策立案の最高ブレインの一人であり、かつ歴代日本銀行総裁について最も造詣の深い私の友人、日本銀行調査局長、経済学博士、吉野俊彦氏にお願いしてこの「深井英五論」を執筆して戴いた次第であります。

日本銀行国債局長 佐藤芳樹

☆ ☆

私は多年に亘って日本銀行の金融政策の研究に従事してきたが、その補助手段として歴代日本銀行総裁の伝記を調査することにして生きている。人間は時代の流れから切り離されて生きることはできないが、しかし、時代の流れはかなり幅の広いものであり、その人間の性格教養能力等によって、時代に処する態度は強くも弱くもなり得るからである。深井英五は、創業以来現在まで二十代十八人に及ぶ歴代日本銀行総裁中の第十三代であるが、その一生を通じて貫かれていた真面目の筋を通して物考えらるという知性の深さにおいて、比類のない人物であった。

深井英五は明治四年旧高崎藩士の子として高崎に生まれた。郷里に隣接した安中の旧藩士である新島襄に知られて明治十九年同志社

まえがき

私の同志社の大先輩であると同時に、日本銀行においてもまた大先輩でもある深井英五先生について、何か書けとの話でしたが、私が同志社大学を卒業して日本銀行へ入行した昭和八年四月当時には、深井先生は、すでに日本銀行副総裁であり、昭和十年六月には総裁に就任され、昭和十二年二月総裁を退任さ

れるまで、私は不幸にして日本銀行京都支店に在勤していた関係で、この偉大なる先輩に親しくご指導を仰ぐこともできず、また直接その人柄に接する機会もなかったことは真に残念に思います。僅かにその名著「通貨調節論」、「金本位離脱後の通貨政策」や「回顧七十年」等によってその高見を学ぶよりすべしなかつたのであります。

に入學し、明治二十四年卒業している。同志社における同級の友人平田久が卒業直後から国民新聞社員となつていた關係で、蘇峰徳富猪一郎に紹介され、明治二十六年から国民新聞社に勤務した。蘇峰の弟に当たる蘆花徳富健次郎も、同志社の上級生であり、深井の入學直後から親切にくれたということである。蘇峰が深井を深く愛したことは、昭和三十七年十一月の「国民史会報」所載、早川喜代次氏の「蘇峰翁の面影五」にのせられて、蘇峰からの深井宛手紙の一節を読むことによつて、直ちに感得されることである。

深井君 君ニ余カスル書状ヲ寄スルハ 今回ヲ以テ始メトナス 余ハ孤灯ノ下 禁ゼント欲シテ禁スル能ハス 為ニ一片ノ永心 數行ノ文字トナル 余ハ斯迄深く君ヲ愛スルコトヲ知ラサリキ (中略)

君ハ万事ニ処シテ 今少シク積極的タル可シ 人ニ処シテ今少シク攻撃ヲ取ル可シ 物ニ処シテ今少シク主地ヲ占ム可シ 此ハ君カ一生ノ訓言也 此ノ意味ハ君ガ独リ自カラ解釈スルニ一任ス 君ヲ推薦シタルハ 君ニ仕事ヲ与ヘンカ為メニアラス 君ニ新ナル學問ト経験ト而

シテ他日社会上ニ於ケル出身ノ位地ヲ得ルノ便宜ヲ与ヘルカ為メ也

明治二十七年十一月十二日

神戸ヨリ

蘇峰生

深井君

さらに十一月二十日朝、蘇峰は深井に次のような熱情をこめた手紙を送つてゐる。

小生カ帰京後筆ヲ取ルハ 此書カ最初ナルコトヲ知り給ヘ (中略)

君ガ成立ヲ祈リ君ガ前途ヲ祈リ且ツ君ガ為メニ (此後ニハ如何ナル言葉ヲ用ニ可キヲ知ラス) 恐ラクハ宇宙間 君ノ慈親ヲ除クノ外余アルノミト思フ (中略)

君ノ學校ニ於ケル評番ヤ 君ノ英語ヤ 哲學的教育ヤ 君ノ談話ヤ 抑モ亦タ締リテ賢コカ爾可キ容顏ヤ 小生ニ於テハ 最初ノ注意ヲ惹起スル導火線タリシナラム 今ヤ全く然ラス 唯タ眼前髣髴トシテ無邪氣ナル 殆ント無罪ナル秀発ナル一青年ヲ見ルノミ (中略) 君ト余トハ ソノ天才ニ於テ其ノ性格ニ於テ各其ノ趨ヲ同フセス 是レ天我儕ヲ合シテ一ノ完全ナル人トナスノ意ニアラサル乎 (中略)

吾人ノ交情ハ 椅子ノ上ニ始マリ墓中ニ終ルコトヲ忘ル、忽レ 余ハ愛ヲ愛ス而シテ 尤モ耐久ノ愛ヲ愛ス (下略)

恐らくこの二通の手紙を読んで蘇峰と深井の間柄があまりにも親密なのに一驚を喫する人が多かるうと思う。これだけ大先輩から愛される後輩というものはざらにあるものではなく、この一事をもつてしても、如何に深井という人物が凡庸でなかつたかを知ることができる。

深井は国民新聞社で、外報部長にまでなつたが、明治三十三年蘇峰の推薦で、当時大蔵大臣をしていた松方正義の秘書官になつた。明治大正にわたる日本の財政金融の第一人者ともいふべき松方に知られる機会を得たことは、深井が日本銀行に入行する機縁となつた。すなわち、大臣秘書官は松方の辞職によつて僅々三カ月で終つたが、明治三十四年松方の推薦により日本銀行の人となり、検査局調査役に任ぜられた。検査局というのは、現在の日本銀行の組織にあてはめていうと、行内各支店支店の監察を行なう検査部と、内外の經濟情勢の調査に当たる調査局とを合体し

たようなものであるが、深井の担当は調査局に該当する仕事であった。その後営業局調査役・秘書役・外事部主事（今日でいえば外国為替局長）、国債局長・営業局長を経て、大正七年理事、昭和三年副総裁となり、さらに昭和十年六月四日から昭和十二年二月九日まで総裁を務めた。

日本銀行入行後の深井の人生コースに大きな影響を与えたのは、日露戦争の際、当時副総裁であった高橋是清に随行して欧米各国に赴き、つぶさに外債募集の辛苦をなめたということであった。明治二年の金融大恐慌によつて、松方正義の勢力は急速に凋落し、これに代つて日本の経済界を指導する立場になつた者は高橋であったが、その高橋に能力を認められ深く信頼をうけたことは、深井が日本銀行総裁にまで累進する重要な要因であつた。このように深井の一生によつて、新島襄↓徳富蘇峰↓松方正義↓高橋是清という連鎖関係は看過することができない意味をもっているのである。

営業局長から理事在職期間中、深井の手がけた仕事は、第一次世界大戦に際会して戦時金融に心をくだしたこと、大正十二年の関東

大震災、昭和二年の金融恐慌に対処することなどであつたが、この間深井の発言は漸次行内においてその重きを加えていつた。昨年秋季私は山形県赤湯町に赴き、第十五代日本銀行総裁結城豊太郎の寄付した臨雲文庫内の未整理の資料を一覧する機会をもつたが、その際理事時代の深井英五から大阪支店長時代の結城豊太郎に宛てた書簡數通をみる事ができた。今その中の二通を引用してみよう。日付は共に大正七年八月十五日付である。

拜啓 益々御健勝奉賀候 先日御上京の節は失礼仕候 御帰任後早速實書を寄せられ恐縮に存候 募債にて御多忙の事と案上候 当方例の為替資金問題は三銀行の意気込仲々盛にして此月曜日より連日官邸に会議を催はし実行方法の討究致し居り候 要するに本行より為替資金を出さしむると云ふことと 為替相場の上下を正金銀行の自由にさせぬと云ふことが主眼の様候 然るに本行は為替相場の上騰を防ぐに効あるだけ兌換券を以て資金を供給すべしとせば 通貨の大膨脹を来たすべきか ソレデモ差支ナキヤと質問的態度を執り 大臣の考慮

を求め居り候 而して米価暴動は通貨膨脹問題に触れ来れる故 為替資金放出論は鈍を鈍らせられ居り候 自今為替相場の大勢に關する根本論を為すは時機未だ宜しからざるを以て ワザト之を控え居り候間 貴台等に於かせられても左様御含み可然と存候（中略）

米価暴動 貴地の不穩益々甚たしき由なるも 今朝より新聞記事禁止せられたる故事情判明せず 適宜御報告を煩わし度候（中略） 匆々不一

八月十五日

結城老台貴下 深井英五

（上略）

当地も昨十四日夜は大分不穩にて所々に群集あり 須田町に集まりしもの一万數千 松屋呉服店の窓ガラスを殆んど全部破壊いたし候由 之を災害の最も大なるものとす 總理大臣を襲ふとの風説あり 軍隊にて同邸を警戒シタル由にて 其他所々軍隊出動 吉原に放火あり 日比谷の群集は何事も為さずして解散シタル由

右一寸御報申上候

八月十五日

匆々不一

この二通の書簡を一読するだけで、深井英五の緻密な性格と、第一次世界大戦末期における経済金融情勢とが髣髴としてくるであろう。すなわち当時の日本は巨額の輸出超過によって外貨を蓄積したが、世界各国が金兌換を停止したため、外貨を取得した市中銀行はこれを金に代えて国内に輸送し日本銀行から円資金を取得することが困難となり、金融は逼迫していた。そこで日本銀行から為替資金を大いに放出するようにという要請が強くなつたが、これに安易に応ずれば兌換銀行券の増発物価の上昇は激化し、特に米価の上昇は著しく、米騒動が全国に蔓延しつづつある状態に拍車をかけるという矛盾が生じた。当時民衆の暴動は日本銀行のすぐ近くの須田町にも見られたのである。これらの様子を深井理事が鋭利な筆致で結城大阪支店長に申し送つていと共、大阪地方の米騒動の実状報告を求めていることは注目に値する事実である。

副總裁時代の深井が特に苦心したのは、金解禁政策と金輸出再禁止政策という明白に対応した二つの時期を円滑にリンクすることであった。金輸出再禁止を実施したのは高橋は清であったが、高橋は深井の識見を高く評価していたので、金解禁に協力した深井を金輸出再禁止後にも活用した。したがつてもしこのとき深井なかりせば、日本銀行と政府との間には相当デリケートな関係が生じていたであろう。この間の事情に付いては批判の余地は多分にあるが、とにかく事実の問題として、深井の存在が政府と日本銀行との関係を破綻の段階にまでもち来らなかつたといえるよう。そして深井を総裁に任命すべく努力したのは、外ならぬ岡田内閣の大蔵大臣高橋は清であった。

昭和十年六月深井が日本銀行総裁に任命された頃、日本経済は正に大きな転機に直面していた。すなわち生産力の余裕は消え去り、増加を続ける軍需品の注文に応ずるためには、軍需会社の設備の拡張が必要となつていた。この関係から市中銀行の貸出しは急増し、日本銀行引受けの赤字国債を引受けることは困難になりつつあった。明敏な深井総裁はこの変化をよく認識していたので、高橋大蔵大臣にこれを率直に指摘し財政政策の転換の必要を進言した。高橋が昭和十一年度の予算案編成に当たり軍事費の削減、赤字国債発行額の漸減方針をとつたのはその結果である。しかし昭和十一年の二・二六事件の際高橋は青年将校によつて虐殺され、経済力の限度内に軍事費を抑制しようという残された理性はかくしてふみにじられてしまった。

二・二六事件当時毎日新聞の記者であつた佐倉潤吾が雑誌「青淵」九十一号にのせた「経済記者の思い出」と題する小論には、次のようなことが書かれてある。事件勃発当日佐倉は金融界の首脳の自宅を巡つたが、どこも門を鎖してしんとしていた。ところが深井家だけは門を開き襲撃団の押し寄せてくるのを待つてゐるかのようであつた。玄関に入る

と深井自身が紋付羽織袴で現われ室に招じ入れた。深井の腰を下した椅子の前には、何年か前に暴徒に暗殺された井上準之助の写真が飾られてあつた。佐倉はそれを見てはつとした。深井は死を覚悟していると直感したというのである。確かに高橋の死を招来した者はある意味で深井であつた。何故ならば、高橋の軍部に対する抵抗の一因が、生産力の余力消滅せりという深井の進言であつたのは、疑いを容れない事実だからである。

深井は二・二六事件後広田内閣が成立すや、馬場大蔵大臣に辞任の意を表すべく面会を求めたが、馬場は深井に留任を懇請し、このため深井は辞表を提出する機会を失した。その当然の結果として、深井は自分自身の行っている政策に自信をもてないのに、これを続けなければならぬ立場におかれた。かくして二・二六事件以後の金融政策は、結果として日本経済をインフレーションの方向にもつてゆく以外の何物でもなかった。それが一つの悲劇であつたのは、深井がそれをあまりにもはつきりと自覚していたことである。この悩みは深井が総裁辞任の決意を本当にきめた直後の昭和十二年一月の東京手形交換所新年会の席上における総裁としての最後の演説に現われている。

「過去数年に亘つて金融が次第に緩慢となり、低金利の勢いが円滑に進行いたしましたのは、財政の運行に伴ひ、又通貨政策上の手心に基き経済界に資金が注入せられたるに起因すると同時に、斯の如き金融上の刺戟に依つて其活動を喚起せられたる諸産業が、従来設備により生産を増加する余力多かりし為め、其の利潤を新設拡張等の使

途に充つるの必要は左迄多からず、究極資金の蓄積が増大して資金需要の程度を超過したことも因るのであります。然るに昨年の下半季頃から、生産を増加する為めには其の設備を新設し、又は之を拡張するの必要が漸次殖えて来たのであります。此方面よりの資金需要が相当顯著に現われて居るのであります。(中略)是等の事實は昭和七年以来の我経済界の趨向にいささか變化を生じつつあるやの感を生ぜしむるものであります。之に対応する為めに考慮すべき点は種々ありますが、其の一つは消費の節約に依つて資金の蓄積を図り、物価の急騰防ぎ以て生産設備の拡張原料の購入等生産増加の方法を容易ならしむるやう資源の涵養に努むることであると思ひます。(中略)我國には高生産力の伸張すべき余地が多いと信じますけれども、条件付に肯定せらるべき見解を無条件に受入れる誤に陥ることなく、今後生産力を増加するには、従来よりも一層多くの努力を要するに至るべきことを記憶すべきであります。」

深井は総裁辞任直前貴族院議員に勅選され、また昭和十三年には枢密顧問官に任命さ

れた。終戦直後の昭和二十年十月病のため逝去したが、死の床についてから深井は自分の最大の失敗は赤字国債を日本銀行引受けの形で発行することを認めた点であり、戦後の日本経済はこの国債の処理如何によつて大きく左右されるであらうともらしたということである。このように深井は不幸なる日本銀行総裁であつたが、彼の足跡がその真意に基づくものでないこと——もちろん総裁としての公的責任はそれによつていささかも減殺されるものではないが——だけは認められてよいのではなからうか。

深井は終生研学を怠らず「通貨調節論」「金本位制離脱後の通貨政策」など長年の思索と体験に基づく名著を残し、自他共に通貨金融問題の最高權威となつた。また自伝としての「回顧七十年」は日本の金融政策史を顧みる者にとつて不可欠の資料である。さらに枢密顧問官就任後議事に付いて感じたところを極秘のうちにノートし、終戦の年の一月から病没の直前まで毎日整理する作業を続けた。これが戦後公刊された「枢密院重要議事覚書」で、深井の人物を如実に示す著作の一つである。

(日本銀行調査局長)